



⑥

# ペルー 南米移民 始まりの地

県系移民が初めて踏んだ南米の地・ペルー。首都・リマを中心に10万人の日系人が暮らし、そのうち7割が沖縄系とされます。強い団結力で日系人社会を支えるペルーの県系人の歩みを紹介します。

## ペルー共和国

**ペルーデータ**

首都	リマ
人口	3199万人
面積	129万km <sup>2</sup>
主な言語	スペイン語、ケチュア語、アイマラ語

●インティライミ  
南米三大カーニバルの一つ。毎年6月に開催される「太陽の祭り」。豊作を太陽に願うインカ帝国の祭り

●ピクーニヤ  
アンデス山脈にすむアルパカに似たラクダの仲間。毛から世界最高級の繊維がとれる

●鉱山  
アンデス山脈沿いにたくさんの鉱山があり、金・銀・銅・亜鉛・鉛などを採掘している

●マチュピチュ  
標高2400mのアンデス山脈の尾根で発見された15世紀のインカ帝国の遺跡。山裾から見えないことから「空中都市」と呼ばれる

●ナスカの地上絵  
紀元前200～後800年に描かれたとされる巨大な地上絵。幾何学模様や動物など700以上あるが、誰が何のために描いたか分かっていない

●チチカカ湖のウロス島  
ポリビアにまたがる標高3800mを超える「天空の湖」。ウロス島はトラと呼ばれるアシでつくられた300ほどの浮島の集まりで、一つの浮島に数十人の先住民が暮らしている

●Si!  
ダイヤモンドのアルベルト城間さんもペルー県系3世だよ

●ハイサイってなんて言う?  
Hola (オハ)

## 紀元前から文明栄える

国の南北にアンデス山脈がはしり、沿岸部には砂漠が、東部には熱帯雨林が広がります。産業の中心は金、銀、銅、亜鉛などの鉱業で、アンチョビー魚などの漁業も盛んです。紀元前からいくつもの文明が栄え、15世紀にはインカ帝国が繁栄しました。16世紀、スペインに征服され、植民地となります。鉱山や各地の農園で酷使され、多くの先住民が命を落としました。1821年にスペインから独立。その後、近隣諸国との戦争や軍政を経て民政へと移行します。1990年、世界初の日系人大統領としてアルベルト・フジモリ氏が選ばれました。

ペルーでは小学校6年間、中学校5年間が義務教育で、その後は大学や専門学校に進みます。日系人学校はリマに4校あり、日本語や日本文化、日本人としての価値観を学びます。人気の遊びはこま回しと麻揚げ。トロンボと呼ばれる円すい形のこまをひもを使って回します。ひもの上を滑らせたり手に乗せたり、相手のこまにぶつけたりして遊びます。また、ペルーの人々は音楽と踊りが大好き。伝統舞踏だけでなく、サルサやレグトンなどさまざまなジャンルの踊りを楽しんでいます。

## 多くの野菜の原産国

ペルーは6000級の山脈に砂漠、国土の6割を占める熱帯雨林と、多様性に富んだ自然豊かな国です。マチュピチュなど謎に包まれた古代文明の遺跡に憧れ、世界中から観光客が訪れます。首都・リマは国の人口の3割が集中する大都市。多くの日系人がリマで生活しています。ジャガイモやトマト、トウモロコシ、ピーナツ、唐辛子。食卓に欠かせないこれらの野菜は、実はペルー原産。美食の国として有名で、沿岸地域の生魚のマリネ・セビーチェや牛の心臓の串焼き・アンティークチョなどが人気です。

ペルーでこまのことをtrompo(トロンボ)というよ



## 県系人の歩み

### ゆいまーるの心で団結

ペルーは日系移民、沖縄県系移民が初めて踏んだ南米の地です。ペルーへの日系移民は1899年に始まりました。7年後の1906年、日本からの第3回契約移民として沖縄県民36人が初めてペルーに渡り、リマ州サンタクララ耕地で働き始めました。泥と葉を固めた粗末な住居や厳しい労働で病気になった人もいました。契約終了後、多くの県系人がリマ市に移り住みました。リマ市の県系人は飲食店や雑貨店などを営み、生計を立てました。彼らは頼母子講(組合)を立ち上げ、ゆいまーるの精神で助け合い、団結を深めました。20年代には沖縄にいる親類らをペルーに招く「呼び寄せ移民」も増えていきます。1906年から41年までに日系移民の35%に当たる1万1753人の県民がペルーに渡りました。

1930年代、都市部では日系人が商業に進出。それに伴い、排日機運が高まってきました。40年に大暴動が起き、日系人の商店などが略奪の被害を受けました。41年の真珠湾攻撃により、日系人は敵性国民として資産の凍結や没収、アメリカの強制収容所への送還に追い込まれました。日本語学校も閉鎖され、日本語教育も禁止されました。終戦後、苦しい生活を強いられる中でも県系人有志が広く一般に呼び掛け、沖縄戦で荒れ果ててしまった故郷・沖縄へ衣類や生活必需品、復興支援金を送りました。48年、沖縄からの移民が再開されます。戦後移民の多くはペルー在住の1世が教育のために沖縄へ送った2世の呼び寄せでした。50年代、正式に沖縄県人会が発足。毎年、市町村対抗のスポーツ大会や演芸会などで交流を深めています。師弟の教育にも熱心で、沖縄県への県費留学などを通し沖縄文化の継承に努めています。

沖縄県での研修や留学経験のある若者らが実施したイベントで行われた石敢當ゲーム。マジムン役が石敢當役に捕まらずにゴールを目指す。市町村対抗で楽しみながら学んだ(ペルー・沖縄県人会きむたか会提供)



昭和初期、リマ市の知念商店(『大琉球写真帖』より 那覇市歴史博物館提供)

## ステキな先輩!

### 県系人の誇り祝う日を リマ出身・県系3世 伊佐正アンドレスさん(30)

第6回世界のウチナーンチュ大会が閉幕した2016年10月30日、「世界のウチナーンチュの日」が制定されました。制定の立役者の一人が伊佐正アンドレスさん(30)＝うるま市＝です。「世界中のウチナーンチュが毎年、そのアイデンティティを確認できる日を作りたいかった」と話します。伊佐さんはリマ出身。母はスペイン系、父方の祖父が東村出身の県系3世です。リマの日本人学校を卒業し大学生となった2009年、同校卒業生を名姓に留学先として派遣することになり、成績トップだった伊佐さんが選ばれました。その時は沖縄に強い愛着がなかった伊佐さん。沖縄で父方の親戚と初対面し、人々の温かさに触れ、「僕の居場所はここだ」と

強く思うようになりました。留学中に猛勉強し、翌年名姓大学に合格します。在学中はスペイン語やラテンダンスの講座を持ち、積極的に南米文化を紹介しました。名姓卒業後、同大に職員として就職。アルゼンチン3世の比嘉アンドレスさんと「各国の独立記念日のように、誰もが心一つになり、喜びを分かち合える日がある」といいと考え、世界のウチナーンチュの日制定に尽力しました。伊佐さんは「世界は広く、世界中に県系人はいる。若い人たちにそのネットワークをもっと有効活用してほしい。広い世界を見ることで、沖縄の良さに改めて気付くことができる」とエールを送りました。



第6回世界のウチナーンチュ大会グランドフィナーレでペルーの旗を持つ伊佐正アンドレスさん(2016年、那覇市)

**ペルーの伝統楽器**

**ケーナ**  
エクアドル、ペルー、ボリビアなどのアンデス諸国で盛んに演奏されている音楽をfolkloreと呼びます。先住民の伝統的な音楽を受け継ぎつつ、スペイン音楽の影響を受けたfolkloreは国や地域で少しずつ形を変えて演奏されています。folkloreはアンデス地方に古くから伝わるケーナやサンポーニヤなどの笛、スペイン人が持ち込んだギターをヒントに作られた弦楽器・チャランゴなどで演奏されます。

**サンポーニヤ**  
ケーナと同じく古くからアンデス地方に伝わるパンパイプ。アシなどの筒を長さの順に並べた原始的な楽器で、上の端に口をつけ、息を吹き込んで音を出します。

日本でも有名なfolkloreは「コンドルは飛んでいく」や「花祭り」(花祭り)はダイヤモンドセブも歌っているよ。ぜひ聞いてみてね!

写真: NPO法人沖縄NGOセンター所蔵、貸出可能

協力 沖縄県立図書館 (毎月第1週掲載)